

## 捨て子としての玉鬘

—「家」における子ども—

### 一、捨てられる玉鬘

何かを捨てるにはそれなりの覚悟がいる。わが身に  
関わってきたものを捨てることは、それまでの生にひ  
とつの区切りをつけ、新たな世界へ踏み出すことに繋  
がるからだ。わが身の一部を切り離すと言ってもよい。  
ちよつとしたものでも捨てきれずにもどかしい思いを  
したり、また捨ててしまったことをいつまでも悔やむ  
のは、捨てることと生きることとの深い関わりを示そ

う。「捨てる」技術にまつわるハウツー本が時折ベス  
トセラーにもなるのは、捨てることの困難さの裏返し  
なのである。<sup>注1</sup>

特に、その紐帯が最も堅固だと信じられている、家  
族や親子関係を捨てることは、それ自体で大きなドラ  
マとなり得ている。ここで取り上げる『源氏物語』の  
玉鬘という女君もまた、捨てる、捨てられるをめぐる  
家族のドラマのなかに生かされている。父内大臣、母

津島 昭宏

夕顔、それぞれから捨てられるかたちで玉鬘がこの物語に設定されていることを、あらためて確認しておきたい。

老人は、ただ、「わが君はいかがなりたまひにし。こころの年ごろ、夢にてもおはしまさむ所を見むと大願を立つれど、遙かなる世界にて、風の音にてもえ聞き伝へたてまつらぬを、いみじく悲しと思ふに、老の身の残りとどまりたるもいと心憂けれど、うち棄てたてまつりたまへる若君のらうたくあはれにておはしますを、冥途の絆にもてわづらひきこえてなむ瞬きはべる」と言ひつづければ、昔、そのをり、言ふかひなかりしことよりも、答へむ方なくわづらはしと思へども、「いでや、聞こえてもかひなし。御方ははや亡せたまひにき」と言ふままに、二三人ながら咽せかへり、いとむつかしくせきかねたり。〔玉鬘〕三十一〇八(注2)夕顔の乳母（大宰少弐の妻）に導かれながら筑紫へと流離していた玉鬘は、後に乳母らと上京し、長谷寺参詣時に立ち寄った椿市の宿において、夕顔の侍女であった右近らと再会を果たす。かつて忽然とすがたを

消した夕顔のゆくえを乳母が尋ねるものの、すでにこの世にはいないと右近が答える場面である。当然、乳母は夕顔の忘れ形見である玉鬘に言及するが、その乳母の言葉は玉鬘の位置を考えるうえで見過ごすことができない。残された玉鬘の将来を危惧しつつ、「うち棄てたてまつりたまへる若君」と、母夕顔から捨てられたのだと的確に語っている。もとより夕顔自身は光源氏に連れ出され、後に「なにがしの院」〔夕顔〕一五一五九で急死したのであって、娘を捨てようという意図はなかったのかもしれないが、事情を知り得ない者からすれば、間違はなくそれは「棄て」られたことに相当するのである。

一方の父にあたる内大臣も、娘に対しては距離をおいていたようだ。「帚木」巻における雨夜の品定め場面を振り返っておこう。内大臣（当時は頭中将）は夕顔との思い出を語っていくが、玉鬘の物語はここから始発することとなる。

「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。

山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはか

## けよ撫子の露

思ひ出でしままにまかりたりしかば、例の、うらもなきものから、いともの思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて虫の音に競へる気色、昔物語めきておぼえはべりし。

咲きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにしくものぞなき

大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど親の心をとる。〔帚木〕一一八二

どうやら頭中将は夕顔のもとへ熱心に通うことはなかつたらしい。夕顔はどのような手紙を送ってきたのかと、光源氏から水を向けられると、手紙に記された夕顔の歌を紹介する。みすほらしいわが家であつても、折々に娘のことを気にかけて欲しい。歌意はこうしたところだが、「あはれはかけよ撫子の露」と、わが娘に配慮を求める夕顔の歌である。対する頭中将は、「親の心をとる」、すなわち夕顔の方が大事なのだとし、「大和撫子をばさしおきて」と、玉鬘のことを二の次にしていたようで、娘には冷淡だったことが窺えよう。もっとも消息知れずになつてからは、「かの撫子のらうた

くはべりしかば、いかで尋ねむ」〔帚木〕一一八三）と思つていたようではある。だが、その所在が分からなくなつて思いやるというのは欺瞞に満ちたものであるうし、やはり積極的に娘に関わつていたわけではなさそうだ。

父親が娘に深く関わらず、母親が失踪してしまつた状況下、夫が大宰少弐となつたことで乳母は残された玉鬘を伴つて筑紫へと下向する。再び上京を考える際の、乳母の言葉を見てみよう。

「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。いときなきほどを、いとらうたしと思ひきこえたまへりしかば、さりともおろかには思ひ棄てきこえたまはじ」など言ひ嘆くほど、仏神に願を立ててなむ念じける。

〔玉鬘〕三一九二

両親と離別した玉鬘の世話をして、その将来を憂慮する乳母としてみれば、都に戻る際に当面頼るべきはやはり父内大臣だけであつた。「さりととも」とわずかな期待ながら、おろそかに「思ひ棄て」ることはあるまいと口にするのは、逆に、いまの玉鬘は父から「棄

て」られたも同然だと思っているからだろう。

このように、夕顔の乳母から「捨つ」という語をもつて、父母と子の関係が見据えられていることは、玉鬘の造型を考えるうえでひとつの視点となつてこよう。もちろん、こうした脆弱な親子関係のなかにある玉鬘については、これまでも貴種流離譚や継母子譚、あるいは「さすらい」をキーワードとして説明されてきた。<sup>(注3)</sup> 父からも見放され、母のゆくえも分からぬまま、四歳の頃に夕顔の乳母夫妻に伴われて九州筑紫へ下向した玉鬘は、養い親にあたる乳母の夫と十歳の頃に死別する。そして、二十歳になると肥前国へと移住し、その地で求婚してきた大夫監から逃れるようにして都へと戻ってくる。右近に見出されたことで新たな養い親たる光源氏のもとで六条院入りを果たすものの、その光源氏を含めさまざまな男たちの欲望の対象となり、予想もしなかつた鬚黒との結婚へと至る。また、玉鬘には流離、さすらいのイメージがどこまでもついて回ってくる。

したがって、こうした話型に絡み取られる玉鬘が捨てられる姫君として描かれることはむしろふさわしい

ものとしてあるわけだが、これまで「捨てる」「捨てられる」ということそのものについてはあまり着目されてこなかつたように思う。捨て子としての玉鬘、そのように位置づけてみた場合に、また新たなことが見えてくるのではないか、こうした目論見のもとこれから考えを進めてみたい。

もちろん、捨て子の問題は民俗学や歴史学の方面からさまざまに研究の蓄積があるが、物語のなかではまた独自の展開を見せていくはずだ。話型や神話的発想を踏まえつつも、それとはまた別のかたちで展開する親と子のすがたを追いかけたいこうと思う。ひとまず、親子間における離別を検討する先に、姨捨伝承の問題から考えてみることにしよう。そこでは家族を捨てることについてどのように受け止められていたかが、非常に分かりやすいかたちで表れているはずである。

## 二、捨てること、捨てられること

辞書によると「捨つ」は、対象物を積極的に投げ出す意味と、対象物をそのまましておく意味があるらしい。<sup>(注4)</sup> 姨捨伝承は前者に、また玉鬘の場合は後者に該

当しようか。しかし、その差異は微妙なところである。放置することは、故意に捨てる責任から目を背けるのと同義だからである。<sup>(注5)</sup>

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

〔古今和歌集〕卷十七・雑上・八七八

『古今集』に載る周知の歌である。同趣の歌は他に、『小町集』（九六）や『拾遺集』（巻六・別・三一九）等に見えるが、『源氏物語』（「若菜下」四―二一七）、『更級日記』（三五九）等の散文にもこの歌は広く引かれるものである。なぜこれほどに流通したのかは難しい問題だが、「姨捨山」と「月」とともに、慰藉されぬ心を表すのにこの歌は持ち出されてくる。だが、諸書に広く見出せるものの、研究史上多くの問題を抱える歌でもある。『大和物語』（百五十六段）では、更級で暮らしていた男が早くに親を亡くしたために、「をばなむ親のごとく」養育していたが、後に妻からの要請もあつてをばを山に捨てるという話である。一方で、『俊頼髓脳』に取り上げられるものでは、をばに養育されていたという点では同じものの、をばを捨てるのが姪になっている点で違いを見せている。こうした歌

や物語の源泉については諸説あり、姨捨山の比定地については一般に冠着山とされるものの解決したと言いがたい。<sup>(注7)</sup> 歌の作者についても、をば、甥、後人といったようにそれぞれ違いを見せる。<sup>(注8)</sup> また、そもそも肉親を山に遺棄するという、倫理的な観点からすれば野蠻で容認しがたい行為のため、それが習俗として実在してはいなかったとするものや、一方で、還暦・隠居・葬送などの習俗の反映であるとするものなど、さまざま議論を生むところとなっている。<sup>(注9)</sup>

ただ、その論の適否はともかくとして、興味深いのはいろいろとバリエーションを変えて姨捨伝承が流通するところだろう。とりわけ、「わが心慰めかねつ……」の歌について、その詠者が、をばか甥か後人かで揺れているのは、そのまま家族を捨てる側と捨てられる側の苦しみ、そしてそれを見届ける者の悲しみをそれぞれが受け持つことに他ならならず、個別の事例を超えた「悲しみ」の慣用表現として流通し、類型化することに繋がっていく。

一方、姨捨伝承に関連しなくとも、親と子における離別の物語は、やはり「捨つ」という語と結びつきや

すいことには注目しておきたい。天上世界へ戻つていくかぐや姫の物語では、

「なにしに、悲しきに、見送りたてまつらむ。我をいかにせよとて、捨ててはのほりたまふぞ。具して率ておはせね」と、泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。  
 (『竹取物語』七三)

と語られていた。竹取の翁は竹林のなかでかぐや姫を発見し、その後、後ととも養育していく。放置されたかぐや姫を翁・姫が養い親となつて育てる点で、まさしく捨て子の物語（貴種流離譚）と呼ぶにふさわしいが、翁はその悲しむべき別れを、自分が「捨て」られるものだと語っているのである。かぐや姫が書き残した手紙の文面にも、「見捨てたてまつりてまかる」（同）と、「見捨つ」の言葉が見えており、離れゆく者からしてもそれは同様の意識であつたことが分かる。また、家族・親子間における離別には、次のような例もしばしば見かけるものだろう。

御四十九日果てて、七月になりぬ。上にさぶらひし兵衛佐、まだ年も若く、思ふことありげもなきに、親をも妻をもうち捨てて、山にはひのほり

て、法師になりけり。

（『蜻蛉日記』上巻、康保四年七月、一五三）  
 上の御前の、御身をさぐらせたまふに、いとひややかにおはします。これこそは例の人に変わったまへることはありけれど、殿も上も、「われを捨ててはいづち、いづち」と、泣きまらばせたまふことかぎりなし。

（『栄花物語』卷二十六「楚王のゆめ」五一三）  
 はじめの『蜻蛉日記』の例は、康保四年七月の記事であり、村上天皇が崩御して「御四十九日」が過ぎたころ、兵衛佐が「親をも妻をもうち捨てて」、出家したとされる。続く『栄花物語』の例は、万寿二年八月、嬉子が薨去した際のもので、母倫子が娘のからだの冷え切っているのを確かめたうえで、道長とともに、「われを捨ててはいづち、いづち」と、嗚咽しているとこゝろである。

出家をすること、また死に別れること、これらにおいても捨てる、捨てられるという関係性で捉えられているのである。おそらく「別る」「離る」などの語彙よりも「捨つ」という語の持つニュアンスが大事であ

り、もの一般に対して使われる「捨つ」が、人間に対して使われるところに重い意味が担わされてくるのだと考えられる。<sup>(注10)</sup>

劇的な継母子譚の話型にも、やはり「捨つ」の表現は呼び込まれてくる。本論で取り上げる玉鬘にその話型は指摘できたが、とりあえずここでは、『うつほ物語』「忠こそ」巻の冒頭を引いて確かめておこう。

「おのれ、世に思ふことなし。忠こそがことを思ふなむ、この世は離れがたく思ふ。『これが人となりて、おのれがなき世にも心安くならむを見、官爵得るまで見生ほさむ』とこそ思ひしか。悪しよしもまだ知らぬ緑子を見捨てむこと、もの後ろめたく、憂きこと」とのたまふ。

(おうふう『うつほ物語 全』改訂版「忠こそ」一一一)

忠こそは五歳で母と死別した後、継母から懸想されたり罵にかけられたりして、遂には出家する。典型的な継子いじめを経験する人物であるが、生母もそれを心配して夫に遺言している。死が目前となつて、自身のことについては何も思い残すことはない。ただ、残

されるわが子だけが心残りである。その言葉のなかに、善悪も分からぬ「緑子」を「見捨て」ることの心苦しさが見えてくるのである。

もちろん以上見たような、家族を顧みないことや見捨てることを「捨つ」と表現することと、姨捨のように実際に遺棄することとは、同じ「捨つ」でも次元の異なることかもしれない。しかし、両者を分けることは、家族を放置することが遺棄することより程度の軽いものと認識させる点で危うい考え方だ。これまた継母子譚として知られる『落窪物語』の例を見てみよう。

「この家も古りてこそあめれど、広うよろしき殿なり」とて、大将殿の北の方に奉りたまへば、北の方聞きて泣きぬ。「……子ども七人持たり。なごこの家をおのれに賜はらざらむ。子どもをこそ〔我に孝することなかりき〕とて思し捨てめ。世の人の親は（もはらさいはひなきをなむ、なからむ時いかにせむ）とは思ひなる。……おのが身、この二人の子どもは、『ここ立ちね』と懲せられむ折は、（いづこにかあらむ）とするぞ。『大路に立て』とや。いと道理なく物なのたまひそ」と言

ひつづけて泣けば、おとど、「子どもも思ひ捨つるにはあらねど、うるはしくこそはせめ、ここなくとも、よに大路にも立ちたまはじ。……」

〔『落窪物語』巻四、二八四〕

落窪の姫君に、「古りてこそあれど、広うよろしき殿」を相続させようとする大納言に対し、継母である北の方は、自身や未婚の娘二人を「思ひ捨てめ」、見捨てているのではないかと詰め寄っている。そして、そのように処置することは「大路に立て」と言うのと

同じだと泣きながら訴えている。「大路に立て」とは、むろん路傍に子どもを放り出すことを意味しているのだろう。北の方の激しやすい性格は割り引かなくてはならないが、必ずしも独力で生活の基盤を築き得ない当時の人々からすれば、家から離反したり財産を相続できないことは死活問題となるはずだ。顧みずに子どもを「思ひ捨」てることが、そのまま大路に投げ出すことに繋がる可能性があることを教えてくれよう。

姨捨伝承やそれに基づく歌が流通するのも、家族や親子をめぐる別れの物語が抜き差しならない問題であったからにほかなるまい。生き別れも死に別れも避

けられぬものであり、それは親を、あるいは子を「捨つ」こととして認識されるものであった。また、同時に貴種流離譚や継母子譚に連接しやすしいものでもあったわけだが、繰り返し強調しておきたいのは、「見捨つ」や「思ひ捨つ」とされることが、単なる類型的な表現にとどまらず、実際の遺棄のそれへと通じていたことである。節をあらためて、『源氏物語』の用例を見ていくこととしよう。

### 三、『源氏物語』における「捨つ」

捨てる、捨てられるに伴う愛別離苦は類型化しつつ、家族離別の物語を象っていく。それは『源氏物語』においても濃厚に認められるものであった。作中に見える「捨つ」は複合言語や関連語を含めると約三百例ある。「世を捨つ」や「身を捨つ」等の慣用表現がやはり目立ち、第三部世界では浮舟に多く用いられているのも特徴的である。仏教的な意味合いも無視できず、それぞれに検討すべき要素を含んでいる。<sup>(註)</sup>さて、約三百例あるなかで、家族や親子の間で用いられる「捨つ」であるが、三十六例を確認することができた。用例の把



16	真木柱 三七八	会話文	真黒北の方↓子(否定)
15	藤袴 三三六	会話文	光源氏↓玉鬘
14	玉鬘 一〇九	会話文	夕顔↓玉鬘
13	玉鬘 一〇一	漢詩	漢兵↓妻兒
12	玉鬘 一〇一	会話文	豊後介↓妻子
11	玉鬘 九三	会話文	内大臣↓玉鬘(否定)
10	松風 四二三	会話文	光源氏↓明石の姫君(否定)
09	滂標 二九一	会話文	光源氏↓明石の姫君(否定)
08	明石 二七〇	会話文	光源氏↓明石の姫君(否定)
07	明石 二七〇	会話文	光源氏↓明石の君(否定)
06	明石 二四六	会話文	明石の入道↓明石の君(否定)
05	賢木 一三四	心内語	光源氏↓冷泉帝(否定)
04	葵 六三	会話文	光源氏↓夕霧(否定)
03	葵 六三	会話文	葵の上↓左大臣
02	夕顔 一八八	会話文	母乳母↓右近
01	夕顔 一三九	会話文	桐壺更衣・祖母北の方↓光源氏
	所在	文種	主体↓客体

握の仕方にも多少の違いはあるかもしれないが、全体の一割を超す用例数からも、親や子を捨てるがこの物語において一つの主題を担っていることを窺わせよう。

36	東屋 六七	会話文	中将の君↓子
35	東屋 四八	会話文	中将の君↓浮舟(否定)
34	東屋 四四	地の文	匂宮↓若君(否定)
33	宿木 四五六	会話文	出家者↓子の屍
32	総角 三一	心内語	八の宮↓姫君
31	総角 二五六	会話文	八の宮↓姫君(否定)
30	椎本 一九〇	地の文	八の宮↓姫君(否定)
29	椎本 一八四	会話文	八の宮↓姫君(否定)
28	橋姫 一二九	会話文	八の宮↓姫君(否定)
27	橋姫 一二九	会話文	八の宮↓姫君(否定)
26	橋姫 一二七	会話文	八の宮↓姫君(否定)
25	夕霧 四八五	会話文	夕霧↓子(否定)
24	夕霧 四七五	会話文	雲居雁↓子(否定)
23	横笛 三五	和歌	光源氏↓薫(否定)
22	柏木 三三五	和歌	柏木↓致仕大臣
21	柏木 三三四	会話文	女三の宮↓薫(否定)
20	若菜下 一六二	心内語	鬘黒↓真木柱
19	若菜上 五一	会話文	朱雀院↓女三の宮(否定)
18	若菜上 四七	会話文	朱雀院↓女子
17	若菜上 三四	地の文	朱雀院↓女三の宮(否定)

掲げたのは三十六例を一覧にしたものである。個別

の者に限らず、家や家族を捨てる例も含め、用例番号、用例の所在、文種、対応人物（捨てる↓捨てられる）、の順に掲げてある。実際に捨てるのではなく、仮定の事例や否定（打消）の形が目立つが、興味深いのは用例全体を見渡すと会話文が圧倒的に多く、それは捨てる、捨てられることが、まさに当事者の意識に関わる問題であることを如実に物語っているはずだ。以下、いくつか具体的に用例を取り上げて検討してみたい。

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。この御畳紙に、

木の下のしづくにぬれてさかさまにかすみの  
衣着たる春かな

大将の君、

亡き人も思はざりけむうちすてて夕のかすみ  
君着たれとは

弁の君、

うらめしやかすみの衣たれ書よと春よりさき  
に花の散りけむ （「柏木」四―三三五）

右は用例番号22に相当し、息子の柏木を亡くして消

沈する致仕大臣（もとの内大臣）のもとへ夕霧が訪れてきたところである。一首目は致仕大臣の歌で、「さかさまに」は、いわゆる逆縁を表すが、自分よりも先に死んだ子のために喪服を着る切なさが歌われている。二首目は弔問に訪れた夕霧の歌。自分が先に死んで喪服を親に着せようとは、まさか思ってもみなかったらうと、亡き柏木の思いを代弁するものとなっている。死別について「うちすて」と見えることは、これまで見たように類型的なものとしてあり、とりたてて問題とはならない。ただ、玉鬘を捨てたとされる内大臣が、逆に息子の柏木から「うちすて」られてしまふのは何とも皮肉な結果である。大切な娘として扱わなかつた玉鬘を放置したのに対し、将来家門を担うはずであった柏木に先立たれているのである。三首目はその家門をこれから担うであろう弁の君の歌で、前二首と同趣の歌となっている。

親よりも子が先に死ぬことについて「捨つ」とする例は、この22と03の例のみであり、他は多く、出家や死別に関わって親が子や家族を捨てる例にあたるものである。捨てる者と捨てられる者、その主体と客体を

見てみると、八の宮とその姫君の例が目立つ。用例番号29にあたる、「椎本」巻の例を掲げてみよう。

「世のこととして、つひの別れをのがれぬわざなめれど、思ひ慰まん方ありてこそ、悲しさをもさますものなめれ。また見ゆづる人もなく、心細げなる御ありさまどもをうち棄ててむがいみじきこと。されども、さばかりのことに妨げられて、長き夜の闇にさへまどはむが益なさを。かつ見たてまつるほどだに思ひ棄つる世を、去りなん後のこと知るべきことにはあらねど、わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。おばろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。……」などのたまふ。〔椎本〕五一―一八四

秋が深まるころ、自らの死を予感する八の宮にとつて、大君と中の君、いずれも独り身である娘の将来が不安でならない。のちに山寺に籠もつてこの世を去る八の宮は、ここで二人の娘に遺言となるべき訓戒をす

る。仏道に専心する八の宮にとって、娘を案ずることこそ長夜の闇にさまようことに他ならないが、娘たちを「うち棄て」る辛さが率直に吐露されている。続けて、軽薄な結婚などせず、この宇治の地で隠棲せよと述べる言葉は、「……使ひたまふな」、「……あくがれたまふな」、「……思ひとりたまへ」と、いずれも強い語調で指示している。父のこうした強制力をもつ言葉が、大君と中の君の今後を縛っていくことになるのは、これまで論じられていた通りだろう。<sup>(注12)</sup> 身寄りのない娘を残し先立つことは、誰の助けも得られぬ「うち棄て」ることだと理解するものの、いやそれだからこそ、自らの言葉で最期に娘たちを律していく。宮家としての矜持を保ち、<sup>(注13)</sup> 家格を汚さぬよう訓戒するのである。<sup>(注13)</sup> 残された娘たちはどのような意識であったか。「椎本」巻に続く「総角」巻で、中の君は匂宮と結婚するものの、その前途は明るいものとは言えなかった。結婚早々、匂宮には夕霧の六の君との縁談が進められていたからである。用例番号32の場面を見てみよう。

もの思ふ時のわざと聞きし、うたた寝の御さまのいとらうたげにて、腕を枕にて寝たまへるに、御

髪のたまりたるほどなど、ありがたくうつくしげなるを見やりつつ、親の諫めし言の葉も、かへすがへす思ひ出でられたまひて悲しければ、罪深かなる底にはよも沈みたまはじ、いづくにもいづくにも、おはすらむ方に迎へたまひてよ、かくいみじくもの思ふ身どもをうち棄てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ、と思ひつづけたまふ。

〔総角〕五—三二〇

妹中の君が昼寝をしているのは、そのまま「もの思ふ」すがたへと通じる。結婚相手としては申し分のない匂宮であつても、そのまま前途が安泰だとは限らない。それについても思ひ出されるのは、父の遺言である。大君は、「おはすらむ方に迎へたまひてよ」と、父に救いを求めているが、苦しみのさなかにある自分たちは、やはり父から「うち棄て」られたものだと認識しているようだ。

子を残して親が先立つことを「捨つ」とするのは、こうして後ろ盾のなさや、憂慮すべき事態が予見されるときであるらしい。朱雀院が女三の宮の今後を危惧する用例番号17、19も同様であり、「棄てがたげに思」

〔若菜上〕四—五一）うからこそ、朱雀院は光源氏に娘を降嫁させ、他方八の宮は強制力ある訓戒を遣していくのである。

さて、親が子を「捨てがたし」と意識することは、以上のような子の将来を憂慮する親の恩愛に由来するとは限らない。すでに、八の宮が宮家としての娘のあり方を意識していたように、子どもが存在は強く家の問題と結び付いてくる。八の宮や女三の宮と並んで用例数が目立つ、光源氏と明石の姫君の例を挙げてみよう。ここでは、捨てられる子と、捨てられぬ子との差異をはつきり確かめることができるはずだ。

女君には、言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこともこそと思して、  
「さこそあなれ。あやしうねちけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなん。女にてあなれば、いとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、さはえ思ひ棄つまじきわざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」と聞こえたまへば、  
〔滯標〕二—二九一

明石の姫君誕生の報を受けて、乳母の派遣など光源氏は十全な処置を施す。大切な姫君に田舎育ちの娘という烙印を押させるわけにはいかない。そのためにも姫君を都に引き取って、紫の上を養母にしようという算段であり、右の例は子どものいない紫の上に姫君のことを語るところである。話しくい生母明石の君との関わりからはじめて、「憎みたまふなよ」と、紫の上の反発を牽制しつつ姫君との対面を企図している。「尋ね知らでもありぬべきこと」と、姫君を軽んずるがごとき言も見えるが、これは紫の上を慮つてものだろう。この姫君は光源氏にとつて后がねたる重要視すべき姫君であった。<sup>(注14)</sup>それが、「え思ひ棄つまじきわざなりけり」の言へと繋がっているのである。

そもそも光源氏に子どもが多いとは言えず、ましてや女子はこの姫君のみである。中宮にも昇り詰めるこの姫君をないがしろにできるはずはない。「思ひ棄てがたき」(07)、「思し棄つまじき」(08)、「思ひ棄つまじき」(09)、「思ひ棄てがたう」(10)と繰り返されるのは、明石の姫君がいかに光源氏にとつて無視できない、栄華を支える存在であったかの証左となつてこよ

う。夕顔の娘玉鬘に関心をもたなかった内大臣とは好対照で、血筋、家柄、将来等を勘案した上で、その子どもがどれほどの重みを持つかが、捨てられる子か否かの分水嶺のようである。

玉鬘はそうした意味において、明石の姫君に匹敵する子どもではなかったということであろう。玉鬘の母夕顔にしても、明石の姫君の母にしても、高貴な母でなかった点で共通するものの、今後のことを見据えて必要とされるものは捨てられず、必要とされぬものは捨てられていくのである。実際、内大臣には複数の女子がいたが、娘を利用した後宮政策が不首尾に終わると、手のひらがえしに放置した玉鬘を捜し求めるといった次第である。やはり玉鬘は、親の都合によつて、家の都合によつて、捨てられ、また求められたのだと言わざるを得ない。彼女のこうした位置づけを考えると、あたり、そろそろ捨て子そのものの問題に触れておかなければなるまい。

#### 四、捨て子の実態、神話・説話の流通

捨てて、捨てられるに伴う親子の悲しみの物語が流

通することは、背景としてそれを支えるだけの捨て子の実態がまたあったと言えるのではないか。アンシアン・レジム期のパリにおいては捨て子が多く存在しているが、現在の日本でも、平成一九年五月一〇日に運用を開始した熊本市の慈恵病院における「赤ちゃんポスト（こうのりのゆりかご）」が話題となったり、里子・里親をめぐるありかたが議論されてもいる<sup>〔注16〕</sup>。捨て子は洋の東西を問わず時代を問わず珍しいことではなく、またさまざまな領域で捨て子の問題は論じられている。山折哲雄はブッダが子を捨てて悟りを得ることについて、また大塚英志はファミリーロマンスを求めめるハーン・柳田・折口のありかたを通して、民俗学そのものに捨て子を求める精神性を説く<sup>〔注18〕</sup>。

ともかく、すでに九世紀後半の『令集解』十「戸令」には、養子の相続規定に関し捨て子の位置が示されており、『政事要略』に引く貞観九年二月七日の宣旨では、捨て子に関する処罰規定が記されている<sup>〔注19〕</sup>。また、都では捨て子の収容施設として悲田院や施薬院の存在が知られており<sup>〔注20〕</sup>、都市に暮らす者たちにとってやむを得ず子どもを捨てることもあったのだろう。『今昔物語集』

卷十九第四十三「貧女棄子取養女語」には、そうした都市生活者における子ども<sup>〔注21〕</sup>の養育の困難さが窺える。現代でも問題となることだが、貧困が捨て子の一因となることは事実であったのだろう。また、『今昔物語集』卷十九第四十四「達智門棄子狗蜜來令飲乳語」にも窺えるが、嬰兒殺害や間引きの類との重なりも意識しておきたいところだ。子どもにとってこの世は、いつの時代も生きがたいものであるらしい<sup>〔注22〕</sup>。

近年、歴史学はこうした捨て子の実態を明らかにしつつあるが、細川涼一は、古代のウヰ的集団の解体のなかから、夫婦を単位とする中世的イエが成立し、それが不安定なため捨て子が生じると、その背景を説明している。そして、そこには「産む性」を担わされる女性のありかたや、家を構えず主人に奉仕する女性の過酷な社会的な立場も関わってくるのだと論じている<sup>〔注23〕</sup>。細川の論じる「家」や「性」の問題は、玉鬘の置かれた状況を踏まえると参考になるところが多い。また、大喜直彦は捨て子に関する史料に基づいて「捨子表」を作成しており、その事例が一览できる点で有益である。大喜は「捨子表」から捨て場所はほぼすべて

境界の場にあるとし、捨てることは現世との縁を切り新たな縁を結ぶことを意味するのだと述べている。さらに、捨て子にされる者には、「異児」、すなわち身体に障害や常人と異なる身体を有する者が多いという、実に興味深い指摘をしている。<sup>〔注2〕</sup> これまた本論で取り上げている玉鬘の問題と繋がるものとして考えることができるだろうが、ここでも古記録から実例を挙げて確認しておきたい。

八日、戊午、人々申慶、亥時許細殿北面女来、乃有小女子、百日許也、預女子者、見之非下人、仍預人令養、

（大日本古記録『御堂関白記』上、寛弘元年十一月八日）

十六日、……而陽明門下聊有穢氣疑、下人申云、棄置小兒於門闕、而乍生又人取了、仍有七日穢疑、……

（大日本古記録『中右記』三、承徳元年四月十六日）  
はじめの『御堂関白記』に見える寛弘元年十一月八日の記事は、道長第に「女」が来て生後百日ほどの「小女子」を手にしてしたが、下人の子でもないようなの

で養わせたというものである。捨てられる子どもは当然その生存が危ぶまれるが、こうして有力者の邸に捨てることはその庇護を期待してのことかもしれない。また、『中右記』に見える承徳元年四月十六日の記事からは、捨て子が陽明門の下という境界に捨て置かれていたことが分かる。「聊有穢氣疑」、「有七日穢疑」とされているのは、捨て子に対する意識が反映したものととして見落とさない方が良いだろう。歴史学関係の諸論では取り上げられていないが、『落窪物語』で「大路に立て」と見えていたのは、こうした境界としての「大路」が関わっていたからこそだと考えられる。『金葉和歌集』には、

大路に子を捨てて侍りける押し含みに、書き付けて侍りける

身にまさる物なかりけり緑児はやらんかたなくかなしけれども

（新日本古典文学大系『金葉和歌集』卷十・雑下・六一一）

と、大路に子を捨てる悲しみの歌が、そのおくるみに書き付けられている。

もとより、現今とは異なる古代の子ども観を考慮に入れれば、以上見てきたような捨て子の実態に対して倫理的な観点から即座に断罪することはできない。こうした点については、儀礼・習俗としての捨て子について注目してきた民俗学の知見も重要である。親の災厄が及ばぬよう子を捨てて親子関係を擬似的に絶つものだとする考えや、身体に欠損があったり病弱であったりする子どもを捨て、あらためて拾うことで息災を祈るものだとする考え方である。<sup>〔注26〕</sup> また、業報ゆえに鬼子や異常児となった子どもを捨てることは、家の贖罪、家繁栄の生贄に繋がるとする見解もある。<sup>〔注27〕</sup> 身体に障害がある者が捨て子として多いことは歴史学の方面からも先の大喜が指摘しており、民俗との重なりを窺わせる。

いずれにせよ、捨て子の問題が異常出生譚や継母子譚、貴種流離譚などに連接してくる理由は右のような実態とも関わってこよう。捨て子の類型・話型は神話や説話として流通していくこととなるが、ヒルコから始まり、弁慶・酒呑童子（「捨て童子」・金太郎へといった英雄譚の系譜といべきものには、多く捨て子の問

題が結び付いてくる。<sup>〔注28〕</sup> 『源氏物語』の光源氏も「夕顔」巻において、「思ふべき人々のうち棄てて」（「夕顔」一一一三九）と、自身が近親者から捨てられたものであることを語っているのだった。

ただ、類型化とは一方で、その個性性を不問に付すことでもあり、捨てることに至る当事者の事情や思惑を詮索するよりも、姨捨の歌のように捨てる、捨てられることの悲しみの感情が優先されていたり、また弁慶のように英雄譚へと傾斜していくものでもある。もちろんここで問題とする玉鬘についても、そうした類型や話型に回収されていくところも多いのだが、しかし、それとはまた別に、捨てる、捨てられるに至るまでの物語の内なる論理をも同時に見定めておく必要があるだろう。そこで浮かび上がってくるのは、やはり「家」の問題なのではないかと思う。

先ほど、『源氏物語』における「捨つ」の用例を確認した際に、明石の姫君に関わる用例が目立つことで、光源氏にとって明石の姫君がいかに彼の栄華を支える「捨てられぬ」存在であるかが見えてきたが、逆に言えば、「家」を支えるに至らない、それが期待されな



い者というのは捨てられる可能性を十分に秘めていたということでもあるだろう。玉鬘にまわりつく話型をあらためて振り返りながら、「家」のなかにおける玉鬘がいかに呼び起こされてくるか、物語の内的論理を以下確かめてみよう。

### 五、「家」に翻弄される玉鬘

捨てられる子どもは、家にとって不要な者、厄災をもたらす者とも思われるのだろうか。他の子どもとは異なり、何かしらの表徴を有する子どもが捨てられることを、まず確かめてみよう。捨てられたことで、自らを、自らの生を肯定することができない者もいたにちがいない。自己肯定感は生まれの貴賤を問わず、親との紐帯が保証されるかどうかにかかっている。

宮、「それは、わが人にもあらねば、御子の数にも思さで、『ただに捨つ』とこそは思しけれ。昔は、鬼にもこそは賜ひけれ。……」。『そは、傾き娘をこそ、かかることし給ひけれな。さらば、ただ捨てられ給へるなり。さて、心ざし浅きにはあらざなりな。捨てさせ給ふ好む鼠もあなり。……』。

『うつほ物語』「蔵開・上」五一〇）  
 『うつほ物語』の女一の宮は、臣下である仲忠と結婚したのは自分が人並みでなく、父から捨てられたためであり、昔そうした娘は鬼にも与えられたのだと述べている。対して仲忠は、不出来な「傾き娘」だからこそ結婚できたのであり、自分はそんな捨てられたものを好む「鼠」であると答えている。夫婦間のくだけた会話であるらしいものの、「傾き女」とあることく、捨てられる子どもにはやはり何かしら欠陥があるらしい。

鬼にもこそは賜ひけれ。卑下の文脈であることは動くまい。また、これは典拠がある表現なのかもしれない。しかし、ここに「鬼」とあるのは不思議と鬼子との繋がりを思わずにいられない。『枕草子』「虫は」の段を引こう。

蓑虫、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似て、これもおそろしき心あらむとて、親のあやしき衣ひき着せて、「いま秋風吹かむをりぞ来むとする。待てよ」と言ひおきて、逃げていにけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりに

なれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く。  
いみじうあはれなり。〔『枕草子』「虫は」九八〕

この段では、実際に鬼が生んだ子どもの話が出てくる。もとよりこれは蓑虫の話で、そのすがたが異様であるため鬼が生んだとしたのだろう。<sup>〔注29〕</sup>だが、親に「逃げられた子どもが「あやしき衣」を身に纏って親を恋慕うというのは、捨て子譚の類話として理解してよいのではなからうか。捨てられる子どもには、やはり異形性が備わるようである。

本論で問題とする玉鬘の場合はどうであったか。筑紫へ下向する際には、「ことなるしつらひなき舟」〔玉鬘〕三一九〕に乗って移動し、上京する際に「早舟」〔同一〇〇〕に運ばれていくのは、葦船によって流される神の子のすがたを彷彿とさせよう。また、鬼ではないが粗暴な大夫監が求婚した際、「天下に目つづれば、足折れたまへりとも」〔同九七〕世話をしようとする発言が見えていたり、「脚立たず沈みそめはべりにける後」〔同一三〇〕という彼女自身の言葉からも分かるように、玉鬘はヒルコの末裔として造型されている。<sup>〔注30〕</sup>ヒルコもまた捨て子であった。裳着が異常に遅い

ことなども含め、その身体的欠損は捨て子としての玉鬘に最もふさわしく、だからこそ、貴種流離譚などの話型をもって説明されてきたわけである。神仏の加護を得るとともに、椿市という境界的な場で右近らと再会を果たしているのも、捨て子のありようにふさわしいものだろう。

しかし、そうした話型の影を濃厚に引きずりながらも、捨て子たちを取り巻く状況は、周囲の者らの思惑が大きく支配していたのであった。一番分かりやすい『蜻蛉日記』の例で確認してみよう。兼家の愛を期待できない道綱母はわが子が成長し離れていくとともに、自身の孤独を癒してくれる、新たな子どもを求めたい。

「身の心細さに、人の捨てたる子をなむ取りたる」  
などものしおきたれば、「いで見む。誰が子ぞ。  
われいまは老いなりとて、若人求めてわれを勘  
当したまへるならむ」とあるに、いとをかしうな  
りて、「さは、見せたてまつらむ。御子にしたま  
はむや」とものすれば、「いとよかなり。させむ。  
なほなほ」とあれば、われも、とういぶかしさに、

呼び出でたり。

〔蜻蛉日記〕下巻、天禄三年二月、二八五）  
 かつて兼家を通つた源兼忠女との間に生まれた女君は、「捨て」られた形で「志賀の麓」（二七九）に暮らしている。その捨てられた姫君を道綱母は養女として貰い受けることになる。誰の子だと問い質す兼家のすがたは痛烈な皮肉だが、捨て子の物語がこれほどあからさまに打算的に語られているのもあまりない。兼家にとつて、家にとつて不必要とされた女君は捨てられ、またそれを貰い受ける側も「身の心細さ」を解消するために捨て子を手にしようとするのである。<sup>注31</sup>

一方で捨てられた者たちは、健気にも親を求め、残された者として必死に生きていこうとする。『枕草子』「虫は」段で、「ちちよ、ちちよ」と親を恋慕していたごとく、『源氏物語』の捨て子たちも親のすがたをどこまでも追い求めるようである。玉鬘は、「おはすらむ所にさそひたまへ」（「玉鬘」三一〇四）と、八の宮の大君は、「おはすらむ方に迎へたまひてよ」（「総角」五一三一）と、自力で生を切り拓く苦しさを感じて親を求めるところは奇妙なほど似通っている。

しかし、捨てられた玉鬘が生き抜くうえで、さまざまな現実的な犠牲を伴う「捨つ」の表現を呼び込んでくることとなる。「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはんとすらん」（「玉鬘」三一〇九）と、養い親にあたる大宰少弐が玉鬘のことを重視することで、少弐の家族は様々なものを手放さざるを得ない。少弐の娘が玉鬘に付き添い上京するにあたっては、「年ごろ経ぬるよるべを棄て」（同九九）と、長年連れ添う夫と別れる。この地を離れることは、「年経つる古里とて、ことに見棄てがたきこともなし」（同）と思うものの、さすがに慣れ親しんだものとの別れは辛い。息子の豊後介も移動する航行中に、「いとかなしき妻子も忘れぬ」と眩きつつ、「みなうち棄ててける、いかなりぬらん」と、捨ててきた者たちに思いを馳せ、「胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」（同二〇一）と詩句を吟ずる。少弐の妻乳母にしてみても、「家籠をも棄て、男女の頼むべき子どもにも引き別れ」（同二一四）るものとして、玉鬘に連れ添うことの困難さを上京後に実感しているようだ。

玉鬘は親から捨てられたが、彼女を守らんとする周

困の者らも、こうして故郷を、家族を、そして一家の守り神ともなる「家竈」をも捨てていくことが求められてくる。<sup>注32</sup>捨てられた玉鬘を再び親のもとへと戻すのに、多く「捨つ」の語が呼び込まれるかたちで、周囲の者らに犠牲を強いるのである。捨てる、捨てられるをめぐって嫉捨伝承で確かめた、あの悲しくも美しきものとして昇華されるはずの物語は、他方で過酷な様相を呈することとなるのである。

捨てられた者が拾われていく内実も、美しき物語ではもはやあり得ない。たしかに、玉鬘が困難な流離を経たのち、長谷寺参詣時に右近と巡り会うところは感動的な再会であり、結果六条院の光源氏に拾われていくことは貴種流離譚や長谷寺の靈験譚などの枠組みによく、ことは貴種流離譚や長谷寺の靈験譚などの枠組みによく、ことばある。しかし、玉鬘を拾い受ける側に当たる光源氏のありようはどうかであったか。右近から玉鬘と再会できたことを聞いた光源氏は、すぐさまその措置を思いつく。念頭にあるのは実父内大臣のことであり、そこに源氏の対抗意識が見て取れよう。

「さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらん。年ごろものついでごとに、口惜しうまどはしつ

ることを思ひ出でつるに、いとうれしく聞き出でながら、今までおぼつかなきも、かひなきことになむ。父大臣には何か知られん。いとあまたもて騒がるめるが、数ならで、今はじめ立ちまじりたらんが、なかなかなることこそあらめ。我はかうさうざうしきに、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はんかし。すき者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」など語らひたまへば、

〔玉鬘〕三一―二二

玉鬘を自邸に迎えて自分の子どもにしてしまうことで、「すき者どもの心尽くさするくさはひ」にしようと企図しているのである。真つ先に知らせるべき実父内大臣に、「何か知られん」と秘匿しようとするのは、家のありかた、子どもの多寡が関わっている。「あまたもて騒がるめる」と、内大臣に子どもが多いことを光源氏は指摘しつつ、自身は数多くないことを述べる。それが玉鬘を養女にする理由だということである。たしかに、玉鬘を自身の養女にすることは、右近から「罪軽ませたまはめ」〔玉鬘〕三一―二二〕と言われるように、横死した母夕顔に対する贖罪、そして鎮魂の意

味もあつたらう。<sup>〔注34〕</sup>だが、娘を抱え込むことで持ち駒とし、男たちの欲望や社会の耳目を集めるといふ政治的思惑をもって光源氏が玉鬘を迎えていることも無視できない。<sup>〔注35〕</sup>

一方、玉鬘を捜し求めた内大臣の対抗心は、「すき者ども的心尽くさずくさはひ」として玉鬘の養父となつた光源氏の思惑が引き金となつており、彼と同様に世の男たちの関心を自らの家に引きつけるべく、新たな子どもを求めていく。

宮、「いかに、いかににはべりけることにか。かしこには、さまざまにかかる名のりする人を厭ふことなく拾ひ集めらるるに、いかなる心にて、かくひき違へかこちきこえらるらむ。この年ごろうけたまはりてなりぬるにや」と聞こえたまへば、

〔行幸〕三三三〇二

ここで内大臣の母大宮は、娘だと「名のり」出てきた多くの者を内大臣が「拾ひ集め」ていると語っている。近江の君をめぐる話の流れだが、まず近江の君が玉鬘の対偶的存在であることを押さえない。<sup>〔注36〕</sup>光源氏に對抗できるよう、自身の「家」のために捨てておいた

子どもを求めようとして、近江の君という出来ない娘を「拾」つてしまつたのが内大臣である。実際、「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ」(「常夏」三三二二六)と、夕霧に対する光源氏の発言を通し、近江の君という「落葉」を「拾」つたことが揶揄されている。内大臣にはあまたの子どもがいるものの、娘はさほど多くない。弘徽殿女御は立后できず、雲居雁は夕霧と親しくなつたことで、東宮への入内も果たせなくなつてしまつた。求めるべきは忘れ形見の玉鬘しかいない。<sup>〔注37〕</sup>もしさやうなる名のりする人あらば」(「蛩」三三二二九)と、息子たちに玉鬘搜索の指示を出した結果、手に入れたのが烏誹者の近江の君であつた。

真相が伝えられ、晴れて玉鬘が内大臣の実の娘だとされた後はどうであらうか。玉鬘が安住の地を得たかどうかである。

「内々にも、やむことなきこれかれ年ごろを経てものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまへで、棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕の筋に領せんと思しおきつる、いと賢くかどあることなりとなんよろこび申されけると、たしか

に人の語り申しはべりしなり」と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、

〔藤袴〕三―三三六

内大臣家での内輪話を夕霧が光源氏に語っているところである。多くの奥方がいる六条院では、その一人として玉鬘を扱えないものだから、「棄て」るつもりで自分のところに「譲りつけ」たのだろう。尚侍として出仕させるのも、「願せん」とする心づもりであろう。このように内大臣は想像しているらしい。内大臣の実娘として位置づけられたのも、今度は光源氏から再び「棄て」られたことを意味するのだというのである。

玉鬘は、実父内大臣、養父光源氏による「家」の思惑のもとで、捨てられ、拾われ、また捨てられていく。同時代の捨て子の過酷な実態を反映しつつ、玉鬘は捨てられた者として造型されているのだろう。そして、ヒルコの影を背負いながら、貴種流離譚や継子譚の話を踏まえた神の子として存在しているのだろう。しかし、捨てられ、拾われ、また捨てられていく玉鬘の内実は、「家」に基づく世俗的な打算や思惑に大きく支配されるものだったと言えるのである。<sup>注38)</sup>

玉鬘をめぐってあらゆるところで光源氏と内大臣は牽制し合う。ふたつの家に、ふたりの父に翻弄される玉鬘の苦悩はどれほどか。「いづ方にも深く思ひとどめられたてまつるほどもなく」〔藤袴〕三―三二七と、どちらの父からも大事にされていないとする自己認識は、やはり重い。

わが親世に亡くなりたまへりとも、我をあはれと思さば、おはすらむ所にさそひたまへ。

〔玉鬘〕三―一〇四

上京を果たして長谷寺へ参詣する際に、玉鬘はこのように心のなかで仏に祈る。まだ、光源氏にも内大臣にも知られる前のものである。すでにこの世にはいない母に、救いを求めるすがたが切ない。だが、この祈りには、ふたりの父と関わってからなおのこと意識されたのではなかったろうか。自己を、自己の生を肯定できる根柢が希薄な玉鬘には、今は亡き母を求めることしか許されていなかったであろうから。<sup>注39)</sup>

## 〔注〕

- (1) 辰巳渚『捨てる！』技術（宝島社新書、平成二二年）、野口悠紀雄『超』整理法<sup>3</sup> とりあえず捨てる技術』（中公新書、平成二一年）、やましたひでこ『新・片づけ術 断捨離』（マガジンハウス、平成二一年）、近藤麻理恵『人生がときめく片づけの魔法』（サンマーク出版、平成二三年）等参照。「捨てる」、「整理」、「片づけ」、いずれにせよそれらは、近藤の書名に顕著なように人間の生に密着した問題らしい。生き方に関わるゆえか、例えば辰巳の書に対しては、立花隆によるいささか感情的な「徹底批判」〔文藝春秋〕平成二二年二月）がなされたりもする。
- (2) 『源氏物語』およびその他の引用は小学館新編日本古典文学全集により、私に傍線・頁数等を付した。新編全集によらないものは各々明記した。
- (3) 小林茂美「玉鬘物語論―物語展開の原動質から―」〔源氏物語論序説―王朝の文学と伝承構造Ⅰ―〕桜楓社、昭和五三年）、長谷川政春「さすらいの女君（一）―玉鬘―」（『物語史の風景』若草書房、平成九年）、日向一雅「玉鬘物語の流離の構造」〔源氏物語の王権と流離〕新典社、平成元年）等、多く論じられる。
- (4) 『日本国語大辞典』第二版（小学館、平成一三年）第七卷、「すてる」語誌欄。
- (5) いわゆる「ネグレクト」の問題が想起される。
- (6) 花部英雄「姥捨山私考」〔昔語伝説研究〕昭和五二年七月）は、起源説を「印度・支那渡来説」、「小長谷山墓所説」、「民俗反映説」に三分類している。
- (7) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』下巻（講談社、平成一〇年）は冠着山と比定されることについて、「俊頼髓脳」や『今昔物語集』の記述に従っているだけという可能性が高い」とする。
- (8) 当該歌の注釈史および『大和物語』百五十六段については、片山剛「姨捨山の月」〔古今和歌集連環』和泉書院、平成元年）、今井源衛『大和物語評釈』下巻（笠間書院、平成二二年）、森本茂「姨捨山の段の生成」〔大和物語の考証的研究』和泉書院、平成二年）等参照。
- (9) 姨捨山伝承については、古典的なものとして柳田国男や関敬吾の論考が挙げられるが、近年のものとし

ては、注(6)(8)および、大島建彦「姥捨て」の昔話と伝説(『日本の昔話と伝説』三弥井書店、平成一六年)、赤坂憲雄「棄老伝説考―秘められた供犠譚のなかへ」(『供犠の深層へ』新羅社、平成四年)、山上伊豆母「霊山の棄老と養老」(『日本の母神信仰』大和書房、平成一〇年)等参照。なお、工藤茂「姨捨の系譜」(おうふう、平成一七年)は、現代文学まで含めて対象化する。

- (11) 原岡文子「玉鬘考―交感・交通・流離をめぐって―」(『源氏物語とその展開 交感・子ども・源氏絵』竹林舎、平成二六年)は、「もの」扱いされる玉鬘を指摘する。また、小林正明「経済学と『源氏物語』／市・循環・呪われたもの」(『解釈と鑑賞』平成二〇年五月)は、椿市という場と関わる点で玉鬘を「商品」と見ている。

- (12) 三角洋一「出家」『源氏物語事典』(大和書房、平成一四年)、松崎宏美「出家遁世譚」(同)、竹内正彦「山のかなたの明石入道」―「若菜上」巻における山入りがはらむもの―(『源氏物語発生史論―明石一族物語の地平―』新典社、平成一九年)、天野紀代子

「身を棄つる」浮舟の物語」(『源氏物語 仮名ぶみの熟成』新典社、平成二三年)等参照。

- (13) 長谷川政春「宇治十帖の世界―八宮の遺言の呪縛性―」(『物語史の風景』若草書房、平成九年)等参照。  
 (14) 藤井貞和「王権・救済・沈黙」(『源氏物語の始原と現在』三一書房、昭和四七年)、日向一雅「八宮家の物語―「家」観念と「恥」の契機を軸として―」(『源氏物語の主題 「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、昭和五八年)等参照。

- (15) 宿曜の予言、「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」(『落標』二―二八五)とあるのに基づく。明石の姫君の重要性については諸論触れるところが、竹内正彦「明石の中宮」(『源氏物語事典』大和書房、平成一四年)に、問題点の整理がある。

- (16) 二宮宏之「七千人の捨児―十八世紀のバリ考現学」(『二宮宏之著作集』第二巻、岩波書店、平成二三年)。  
 (17) 赤ちゃんポストの問題については、こうのとりのゆりかご検証会議「『こうのとりのゆりかご』が問いかけるもの―いのちのあり方と子どもの権利」(明



- 石書店、平成二二年）、熊本日日新聞「こののとり  
のゆりかご」取材班『揺れるいのち 赤ちゃんボス  
トからのメッセージ』（旬報社、平成二二年）、田尻  
由貴子『赤ちゃんポスト』は、それでも必要です。  
―かけがえのない「命」を救うために―（ミネル  
ヴァ書房、平成二九年）が参考になる。なお、「週  
刊ポスト」（平成二〇年四月）は、「えっ！「赤ちゃ  
んポスト」に障害児が預けられていた」と題した記  
事を掲げている。記事内容の適否はさておき、障害  
児が捨て子となることについて刺激的な言説をもつ  
て報じられる基底には、排除される者に対するわれ  
われの差別的な好奇心が潜んでいよう。
- (17) 山折哲雄『ブッタは、なぜ子を捨てたか』（集英社  
新書、平成一八年）。
- (18) 大塚英志『捨て子』たちの民俗学―小泉八雲と柳  
田國男（角川書店、平成一八年）。
- (19) 『令集解』十「戸令」（新訂増補国史大系・第二十三  
巻）、『政事要略』巻七十「出棄病人及小児事」（新  
訂増補国史大系・第二十八巻）。
- (20) 悲田院および施薬院については、新村拓「悲田院と  
施薬院」（『日本医療社会史の研究―古代中世の民衆  
生活と医療』法政大学出版局、昭和六〇年）、網野  
善彦「古代・中世の悲田院をめぐって」（『網野善彦  
著作集』第十三巻、岩波書店、平成一九年）、西山  
良平「平安京施薬院・悲田院考」（『律令国家史論集』  
塙書房、平成二二年）等参照。
- (21) 千葉徳爾・大津忠男「間引きと水子」（『農山漁村文  
化協会、昭和五八年』等参照）。
- (22) 平安期の社会が子どもとっていかに過酷であつた  
かについては、服藤早苗「たくましく生きる子ども  
たち」（『平安朝の母と子』中公新書、平成三年）、  
増淵徹「平安時代の子どもの周辺」（『生・成長・  
老い・死』竹林舎、平成二八年）等参照。
- (23) 細川涼一「中世の捨て子と女性」（『女の中世 小野小  
町・巴・その他』日本エディタースクール出版部、  
平成元年）。
- (24) 大喜直彦「子どもと神仏―捨て子、境界の子―」（『中  
世びとの信仰社会史』法藏館、平成二三年）。歴史  
学から捨て子を扱ったものとしては他に、西山良平  
「平安京の病者と孤児」（『都市平安京』京都大学学

術出版会、平成一六年）、増渕徹「平安京と捨て子に関する覚書」（『女性歴史文化研究所紀要』平成二二年）等がある。また近世を対象にしたものだが、沢山美果子『江戸の捨て子たち その肖像』（吉川弘文館、平成二〇年）も参考となる。なお、障害を負う者が捨て子となることについては、近藤ようこ・津原泰水『五色の舟』（KADOKAWA、平成二六年）等の創作も注視される。

(25) 古代・中世の子ども観については、黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』（東京大学出版会、昭和六一年）、小林茂文『周縁の古代史―王権と性・子ども・境界―』（有精堂、平成六年）、加藤理『ちよ』と「わらは」の生活史―日本の中古の子どもたち―（慶應通信、平成六年）、服藤早苗『平安王朝の子どもたち 王権と家・童』（吉川弘文館、平成一六年）等参照。

(26) 柳田国男「赤子塚の話」「山の人生」（『柳田国男全集』第三卷、平成九年）、大藤ゆき「拾い親」「見やらい」（岩崎美術社、昭和四三年）等参照。なお、井上正一「不具の子を捨てる民俗―靈異記の民俗史

料―」（『日本歴史』昭和四六年二月）は、『日本靈異記』に見える諸例に、現代の捨て子の民俗との繋がりを見ている。また、「捨」「拾」と子どもに命名する民俗も知られるが、豊臣秀吉の例については桑田忠親『太閤の手紙』（講談社学術文庫、平成一八年）参照。

(27) 岩本通弥「泣き虫子虫はさんで捨てる―民俗的世界から見た捨て子」（『月刊百科』昭和五六年二月）。

(28) 井本英一「捨て子の話」・「捨て子と再生」（『王権の神話』法政大学出版局、平成二年）、佐竹昭広「捨て童子譚」（『酒吞童子異聞』岩波書店、平成四年）、高崎正秀「金太郎誕生縁起」（高崎正秀著作集第七巻『金太郎誕生譚』桜楓社、昭和四六年）等参照。

(29) 「ちちよ、ちちよ」の理解を含め、当該段の解釈上の問題点については、萩谷朴『枕草子解環』第一巻（同朋舎、昭和五六年）に詳しい。

(30) 注（3）参照。

(31) 道綱母が養女を迎える意図・目的に関する諸論については、倉田実『蜻蛉日記の養女迎え』（新典社、平成一八年）が詳細に検討している。なお、兼家の

- 愛が期待できないなか、道綱母が養女を迎えること  
で「母」として自身の存在理由を求める点について  
は、津島「母」へ逃げ込む道綱母―「幼き人」道  
綱の形象化をめぐる―」（『横浜英和学院教育』平  
成二二年三月）参照。
- (32) 飯島吉晴『竈神と廁神―異界と此の世の境』（人文  
書院、昭和六一年）参照。
- (33) 倉田実「玉鬘の装着―養女となる次第―」（『王朝撰  
関期の養女たち』翰林書房、平成一六年）参照。な  
お、本書は平安文学における養女について総合的に  
取り上げており参考となる。平安時代の養子制度に  
ついては、高橋秀樹『日本中世の家と親族』（吉川  
弘文館、平成八年）、同「平安時代の養子に関する  
近業をめぐる」（『王朝人の婚姻と信仰』森話社、  
平成二二年）参照。
- (34) 注(3) および、藤井貞和「夕顔の娘玉鬘」（『源氏  
物語論』岩波書店、平成二二年）、日向一雅「怨み  
と鎮魂―源氏物語への一視点―」（『源氏物語の主題  
「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、昭和  
五八年）等参照。
- (35) 森一郎「玉鬘物語の構想について―玉鬘の運命を  
めぐって―」（『源氏物語の方法』桜楓社、昭和四四  
年）、三谷邦明「玉鬘十帖の方法―玉鬘の流離ある  
いは叙述と人物造型の構造―」（『物語文学の方法  
II』（有精堂、平成元年）等参照。
- (36) 後藤祥子「玉鬘物語展開の方法」（『日本文学』昭和  
四〇年六月）等参照。
- (37) 内大臣の後宮政策を含めた政治的思惑については、  
田坂憲二「頭中将の後半生―源氏物語の政治と人間  
―」（『源氏物語の人物と構想』和泉書院、平成五年）  
参照。
- (38) 「家」の問題をめぐることは、明石一紀『日本古代の  
親族構造』（吉川弘文館、平成二年）、『古代・中世  
のイエと女性―家族の理論』（校倉書房、平成一八  
年）、服藤早苗『家成立史の研究』（校倉書房、平成  
三年）、注(33) 高橋前掲書等参照。
- (39) 玉鬘が母夕顔を求めることについては、津島「空を  
ながめる玉鬘―「親」に対する意識をめぐる―」  
（『国学院大学栃木短期大学紀要』平成二八年三月）  
で論じたことがある。